



2011年の冬は、いつまで経っても雪が降り続き、春が遠く感じられた。そんな冬も終盤である3月、卒業シーズンを迎え田野畑中学校でも卒業式にむけた準備を急いでいた。どこにでもある平穏な日常。しかし、それは一瞬にして奪われてしまう。

3月11日、あまりにも突然すぎる出来事だった。はっきりとした地鳴りと共に大きすぎる揺れが東日本を襲った。小さな揺れを感じることなく、すぐさま地上にあるすべてのものが揺れ始める。今までに経験したことのない揺れだった。終わらない――。

揺れがおさまるまで、身を守ろうと冷静に机の下に隠れた。しかし、待っても待ってもおさまらない揺れ。それは、完全に予想外でどうしたらいいのか分からなかった。だんだん大きくなるようにすら感じられる揺れは、身動きがとれない私達の恐怖心を募らせた。その内、先生達の指示によって、外に避難させられ一応は身の安全を感じる事ができた。しかし、この地震はほんの予兆にすぎなかった。

気がつくや、鳴り響いていた津波警報、これだけの地震ならばと誰もが津波の襲来を悟った。外に出た生徒は皆、黙りこみ不安と戦っていた。そんな私達を追いつめるように降り出す雪。天災の厳しさは限りなかった。そして、ついに津波が来たという情報が入った。一秒一秒どんどん変化する状況にどうすることも出来ず、ただ時間が過ぎるのを待つことしかできなかった。

それから先は、大変な生活だった。永遠に終わらないのかと思う程の余震を恐れ、1時間もかけて家に帰り、電気もガスもない生活を強いられる。数日経って電気が戻り、テレビがついても、ほとんどが悲しいお知らせでうめつくされていた。最も辛かったのは、津波が来た地域を見たこと。これまで10年以上見て来た景色がそこにはなかった。あるのはがれきだけだった。本当にショックで言葉がでなかった。私達は、学校に居たため、津波を見ていないけれど、それがどれ程のものだったのか、容易に推測できた。田野畑を襲った津波の怖ろしさは、心に深く刻まれた。

それからは、自衛隊の方々や沢山のボランティア、そして、村民の協力のかいあって、急速に復旧にむかった。しかし、その後も考えることは沢山あった。自分は大きな被害がなかったけれど、家や家族を失ってしまった人にはどのように接したら良いのか悩んだり、震災をしっかりと受け止めなければと分かっているけど、ニュースを観るのが少し辛かったり、そして何より、今、自分がすべきこと、できることは何なのか……。

震災から1年が経った今、自分なりに考えていること、それは、東日本大震災の経験を忘れない、そして伝えていくことだ。今回の震災で出てしまった悲しすぎる被害。残された人の悔しさをもう二度と繰り返さないため、地震の多い国、日本に生まれ、震災を経験した人としてすべきことだと思う。

また、この1年、沢山の人が支えられ、助けられて生活することができた。被災地がここまで復旧できたのも、人と人とのつながりがあったからだと思う。私達にできるのはそれらの支援に対し、感謝の気持ちを持ち、その思いを少しずつでも行動に移していくこと。震災がきっかけで生まれたつながりをこれだけで終わらせないために、恩返しをすることが大切だと思う。

震災で失ったものは大きいけれど、得たものもあったはずだ。その小さな芽を育てていくことが東日本大震災を乗り越え、未来を創っていくために重要だと思う。

これからは今、自分にできる最大限のことをしていきたい。復興への兆しが見えるように。田野畑のこれからを創っていくのは、まぎれもなく、私達なのだから。